

写本絵画

宗教的制約があったとはいえ生物が全く描かれなかったわけではなく、絵画は写本の挿絵として発達しました。メトロポリタン美術館はじめ海外美術館、ウズベキスタンにおける調査、文献調査に基づいて制作した模写作品を通してペルシア写本絵画の特徴を解説します。



画面からの「はみ出し」と繊細な細部の表現が見られ、枠外には箔散らし（ザルアフシャー）が施されています。



「おお扉を開く者よ」ペルシア語はアラビア文字で表記され、右から左へ読みます。

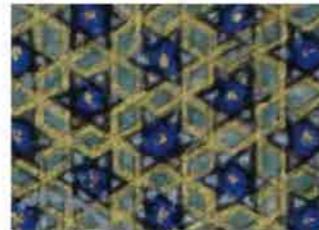


幾重にも引かれた装飾的な枠線はジャドバルと呼ばれます。線を引く専門家がいて、人物、文様、線は分担して描かれていました。

物語の挿絵（具象絵画）

「宮廷歓待図」

『果樹園』の物語の挿絵で、宮廷での歓待の場面が描かれています。サーリフ王が市場を散策していると男達が自分を悪く言うのを耳にします。王は二人を咎めることなく宮殿に招き、もてなして言いました。「私は今日、和解の扉を開いた そなたは明日、私に対して扉を閉ざすな」画中には「おお扉をひらく者よ」のペルシア文字があります。シャイフ・ザーダはイスラームで最も有名な画家ピフザードの弟子で、「宮廷歓待図」は写本制作最盛期の作品です。



緻密な文様表現

『果樹園』と『薔薇園』

イスラーム世界ではクルアーンが宗教教育、信仰の基本でしたが、それに次いで人間形成、実践道徳教育の教材としてサーディーの二大作品『果樹園』と『薔薇園』が用いられました。ともに教訓・実践道徳に関する内容であり、前者は詩集、後者は散文が主体で多くの詩が織り込まれています。

サーディー著『果樹園』写本挿絵、シャイフ・ザーダ画「宮廷歓待図」模写 原本は1525-1535年プハラ（現ウズベキスタン）にて制作されメトロポリタン美術館所蔵

金泥画（ハッルカーリー）

写本の原稿の余白に施されることが多く、連続した植物文様、動物、龍や不死鳥などが描かれました。



クリーブランド美術館所蔵のサーディー著『薔薇園』写本挿絵をもとにした応用作品（部分）

文様絵画（タズヒーブ）

文様で構成された絵画。タズヒーブとはアラビア語の「金を埋める」という意味で、写本の金彩画を基とし、次第に色が変わりました。文様は絵画の脇役と思われがちですが、イスラーム美術では主題として扱われ、絵画の一分野を形成しています。



写本絵画に使われた色材。ラピスラズリはアフガニスタンで産出されます

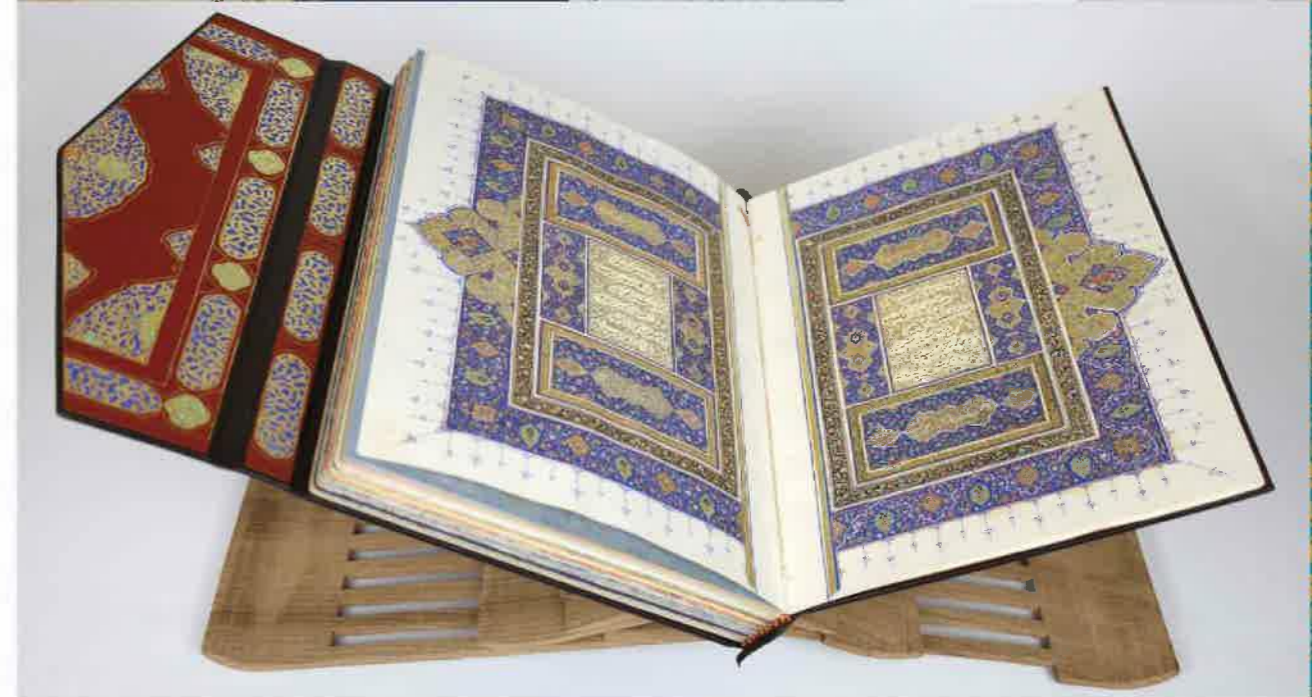
アフマドシュアイヴ「エスルーミー」

PAPER CONNECT TOYOTA 2024



文化庁

令和6年度文化庁文化芸術振興拠点形成事業



イスラームの紙と芸術表現展

会期 2024 10.1(火) ▶ 10.27(日)

豊田市小原和紙のふるさと 小原和紙美術館

会期中の休館日 10.7(月) / 21(月) 開館時間 9:00-17:00 (入館は16:30まで)

【観覧料】一般200円 (有料入館者20名以上の団体は1人150円)

【会場】豊田市小原和紙のふるさと 小原和紙美術館
〒470-0562 豊田市永太郎町洞216-1

【電話】0565-65-2151

【主催】豊田市小原和紙のふるさと

【プロデュース】鈴木美賀子



<https://www.washinofurusato.jp>

◀ 小原和紙のふるさとWebサイトはこちら

イスラーム地域の紙と芸術

ヨーロッパ同様イスラーム地域でも、古くは獣皮紙に文字が記されました。紀元前2世紀頃、中国で紙が発明されて製紙法が伝わると、柔軟性に富み、獣皮より安価な紙は急速に普及して多くの写本が制作されました。本展では最も早い段階で紙漉きが行ったサマルカンドの紙漉きをはじめ、ペルシア語文化圏の紙と芸術について、截金作家の鈴木美賀子が金彩研究の視点から行った博士研究作品と資料を中心に紹介します。



イスラームとは西暦610年にアラビア半島のメッカ（現サウジアラビア）でムハンマドが創唱した宗教です。その教えは8世紀半ばまでには中央アジア西部、インド、イラン、イラク、シリア、アラビア半島、エジプト、北アフリカ、スペインを含む広い地域で主要な宗教となっていました。主な言語はアラビア語とペルシア語で、この2つの文化圏に大別できます。

紙の発明と西方への伝播

中国で発明された紙は、751年のタラス河畔（現キルギス）の戦いでアッバース朝の捕虜となった唐の製紙職人から西方に伝わったとされてきました。実際には、それ以前に伝わったと考えられており、8世紀前半までにサマルカンド、後半にはアッバース朝の首都バグダード（現イラク）に製紙場が作られました。さらに9世紀にはシリア、エジプト、10世紀にはイラン、11世紀には北アフリカ、スペインで製紙が行われました。

写本が作られた時代の紙と加工

紙の原料は主に綿でした。文字は草筆で書かれたので、紙の表面には円滑さが求められ、「鏡面のような光沢のある紙」が美しいとされました。水に溶かした小麦粉や卵白などを紙の表面に塗って乾かし、石や貝で磨くことにより、滲み止めの効果と光沢が得られました。



写本の紙は薄く、表面に光沢が見られます



磨くための貝や石

サマルカンドの紙漉き

現在、サマルカンドには一軒の紙漉き工房があります。これは途絶えていた紙漉きを復興させるべく、1998年にユネスコ (UNESCO) と日本の独立行政法人国際協力機構 (JICA) の資金援助によって復活されたものです。メロス工房の紙は桑を原料とし、樹皮などが漉き込まれた工芸紙のような風合いで、伝統的な紙とは異なりますが土産品として観光客に人気です。



メロス工房では水車の動力を利用して紙の原料を叩解しています



メロス工房内と紙

アラビア文字と紙

イスラームはアラビア半島で生まれたため、聖典クルアーンはアラビア語で記されました。聖典を記す書は造形芸術の筆頭に挙げられ、書家は最も高い地位を持つ芸術家でした。様々な書体が考案されて書道へと発展します。アラビア書道に用いられるアハール紙の加工には、今も伝統的な方法が受け継がれています。



アハール紙は卵白加工をした紙で、表面に光沢があります



ペンとペンケース

写本芸術

写本とは印刷が普及する以前に、手書きによって写された書物です。イスラーム地域では多くの写本が作られ、写本を舞台に書、絵画、装丁が展開しました。全ての写本はクルアーンの形式を基本とし、はじめにシャムサ、次にサルラウフと呼ばれる見開き口絵が描かれます。



メトロポリタン美術館所蔵、サーディー著『果樹園』写本の部分模写



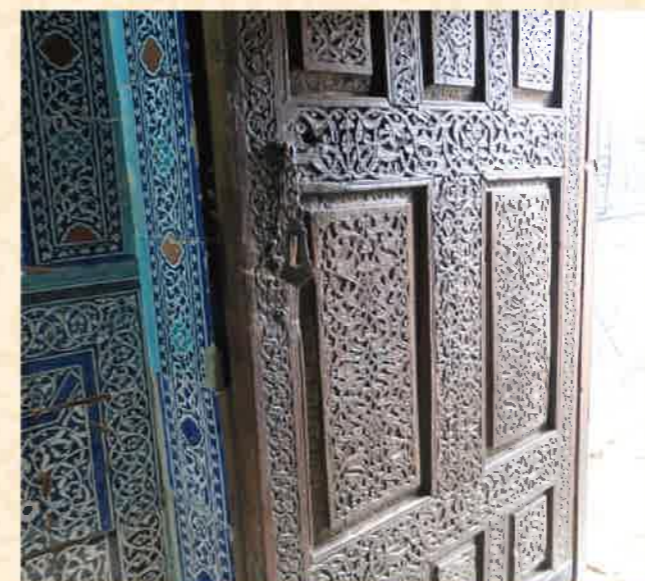
イスラーム写本に特徴的な三角形の小口覆いとシャムサ（巻頭装飾）



サルラウフ（見開き口絵）

イスラーム文様

イスラームでは偶像崇拜と生物描写が忌避され、教理に反しない文様装飾が好まれました。植物文・幾何学文・組紐文・文字文様などがあり、文様を彩飾する専門家はムザッヒブと呼ばれました。写本、建築、工芸品などあらゆるものに施され、イスラーム美術の重要な要素となります。



遺跡のタイルや屏の文様装飾 ヒヴァ（ウズベキスタン）

